

拘束廃止により活動的で生き生きと過ごせる病院に！

西条愛寿会病院

1 施設の概要

西条愛寿会病院は西条市に位置し、3病棟、定員135名の介護療養型医療施設であり、併設事業として短期入所療養介護、通所リハビリテーションを行っている。同一敷地内に関連施設として、特別養護老人ホーム福武荘、老人保健施設ゆるぎ荘、デイサービスセンター福武荘、グループホーム福寿、居宅介護支援事業所福武荘、ケアハウス福寿があり、地域の保健、医療、福祉の中心的役割を担っている。

2 施設での身体拘束廃止に向けての活動目標

- (1) 日中、レクリエーション等の活動を取り入れ、ベッドから他の場所へ移動し、必ず見守りを行い、車椅子ベルト等で拘束しない。
- (2) 日中着に着替えてもらい、生活にメリハリをつけてもらう。
- (3) どのような問題行動があり、何を見守るかを把握し、安全な生活ができるようにする。

3 拘束状況

7月の支援チームの相談活動開始時に、医療保険ベッドでミトン装着者が一人いたが、献立の検討、経口摂取、夜間清拭、日中は車椅子で過ごす等により、ミトン装着を解除した。

	4月	5月	6月	7月	8月
車椅子ベルト	16	1	0	0	0
ベッド柵	14	6	0	0	0
ミトン	4	4	1	1	0
つなぎ服	3	3	0	0	0
合計	37	14	1	1	0

4 身体拘束廃止の取り組み状況

- (1) アセスメントで原因の把握後、ケアの検討を行い、家族へのカンファレンスで、施設の方針や拘束の弊害等を十分説明し、理解を求めている。
- (2) 定期的な勉強会や医師、看護・介護職員、理学療法士、作業療法士、栄養士を委員とした「身体拘束廃止検討委員会」での各病棟の取り組み状況の発表、マニュアルの配布により、情報の共有を図っている。
- (3) 各階病棟に浴室があり、週3回の入浴を実施している。

- (4) 介護職員が家庭用のエプロンに着替えて食事介助を行うなど、家庭的で潤いのある雰囲気づくりを行っている。
- (5) 支援チーム委員の施設での取り組み状況の紹介や職員が支援チーム委員の施設を見学に行き、処遇向上に係る情報交換を行った。
- (6) 第3回の支援活動以降、併設の介護老人保健施設、隣接する痴呆対応型共同生活介護事業所、介護老人福祉施設が参加しており、身体拘束廃止活動を他施設に広げることができた。
- (7) これまで行ってきた身体拘束に止まらず、今後の課題として、「口から食べる」を重要課題として、摂食機能訓練、口腔ケアに取り組み、更なるケアの向上に努めている。

5 効果等

- 1 日中は離床し、食堂で食事を摂り、廊下等でレクレーションを行うなど、患者が活動的になり、生き生きとしてきた。
- 1 介護・看護職員とのコミュニケーションが良くなった。
- 1 開始後、無理ではないかとの意見があったが、思い切って実施してみると、うまくいった。
- 1 拘束が当たり前ではなくなり、意識改革ができた。
- 1 職員の意識が変わり、病棟全体で見守りを行うことで、ヒヤリ・ハットの報告件数が増加しており、報告を分析するなど、リスクマネジメント対策が充実してきている。
- 1 入院前（家庭や施設）の拘束を解除する際、家族への説明、同意に苦慮することがあった。
- 1 患者と話す機会が多くなり、いろいろな介護方法をスタッフ全員で考えるようになった。

6 施設従業者の意見

- 1 身体拘束は「必要だから」と何の疑いもなく行ってきた。しかし「拘束はいけないうこと」を理解する上で、スタッフが体験したことを発表しあうことにより、拘束の弊害を理解することができた。
- 1 栄養士と身体拘束廃止は一見関連がないと思っていたが、拘束することにより食欲不振、低栄養となり褥瘡が発生することなどがあり、チーム医療の大切さがわかり、チームの一員として何をすべきか考えるようになった。
- 1 拘束廃止の意識統一ができ、何事にも前向きに取り組むことができるようになった。
- 1 少しの勇気と前向きに取り組む姿勢が大切だと思う。
- 1 一つの目標にスタッフ全員で取り組むことにより、困難と思っていた問題を解決できる方法があることが分かった。

- 1 利用者中心に看護・介護を考える姿勢が定着した。
- 1 これくらいの拘束なら良いのではないかという考えを捨てる。
- 1 見守りを徹底することで声かけの回数が増え、表情が明るくなり、発語も増え、今まで知り得なかった性格、癖等が分かり、ケアの質の向上につなげることができた。
- 1 身体拘束廃止により、入院患者がのびのびとして、表情の変化から開放感が感じられる。
- 1 拘束を外すときは、「この患者の拘束を外すことは、絶対に無理だ。」と思っていたが、拘束を外すことで落ち着かれたのか、問題行動が無くなっていった。拘束に頼る介護ではいけないと強く思った。
- 1 ベット柵を外す事により、患者には開放感を、家族には良い印象を持っていただけだ。
- 1 他の施設から転所された患者が介護衣を着ていると、「なぜ介護衣を着ているのだろう。」と考えるようになり、意識改革が全スタッフに浸透してきたと感じている。
- 1 身体拘束(車イスベルト)をしていた患者から「外して欲しい。」の声がなくなり、窮屈な思いをしなくて良くなった。
- 1 嚥下訓練や摂食機能訓練法を取り入れ、看護・介護職員ができるようになりたい。

7 まとめ

当施設では、施設長主導の下、身体拘束廃止検討委員会を発足させ、各職種が同じ目標に向かって一丸となって取り組み、身体拘束支援活動の入る前に身体拘束を廃止していたが、更なるケアの向上を目指し、支援チーム委員の施設(介護老人福祉施設及び介護療養型医療施設)を訪問して情報交換を行い、食堂や廊下にある椅子の高さの検討や、口から食べるための口腔ケアの取り組みを推進していく目標を掲げるなど、身体拘束廃止から次の段階にステップアップしている。

従業者の意見、感想の中には、「絶対に無理だと思った。」とか新たに見守りの業務が増えるなど、不安や戸惑いがあったが、それを乗り越え、一步踏み出すことにより、利用者の顔つきや、家族の印象、施設の雰囲気等が良い方向に変わったことに対する喜びの意見が多数あった。

改めて現場職員の皆様の力強さを感じるとともに、当施設が地域の介護サービスの拠点となって、今後の介護サービスをリードしていただけるものと期待している。